

弱者の傍らに身を置く 自覚的で明快な思い

朝日新聞 2014.8.5

(太字は引用者による)

(略)

七月二十二日、今上と皇后の両陛下は宮城県登米市にある国立のハンセン病療養所「東北新生園」を訪れられた。これで全国に十四カ所ある療養所すべての元患者に会われたことになる。

六月には沖縄に行って、沈没した学童疎開船「対馬丸」の記念館を訪れられた。戦争で死んだ子供たちを弔い、今も戦争の荷を負う沖縄の人々の声を聞かれた。

昨年十月には水俣に行って患者たちに会われている。

東日本大震災については直後から何度となく避難所を訪問して被災した人たちを慰問された。

これはどういうことだろう。我々は、史上かつて例のない新しい天皇の姿を見ているのではないだろうか。

日本国憲法のもとで天皇にはいかなる政治権力もない。時の政府の政策についてコメントしない。折に触れての短い「お言葉」以外には思いを公言されることはない。行政の担当者に鋭い質問を発しても、形ばかりのぬるい回答への感想は口にされない。

つまり、**天皇は言論という道具を奪われている。しかし**この国に生きる一人として、思うところは多々あるだろう。**その思いを言論で表すことができないが行動で表すことはできる。国民はそれを読み解くことができる。**

八十歳の今上と七十九歳の皇后が頻繁に、熱心に、日本国中を走り回っておられる。訪れる先の選択にはいかなる原理があるか？

みな弱者なのだ。

責任なきままに不幸な人生を強いられた者たち。何もわからないうちに船に乘せられて見知らぬ内地に運ばれる途中の海で溺れて死んだ八百名近い子供たち、日々の糧として魚を食べていて辛い病気になった漁民、津波に襲われて家族と住居を失ったまま支援も薄い被災者。

今の日本では強者の声ばかりが耳に響く。それにすり寄って利を得ようという連中のふるまいも見苦しい。経済原理だけの視野狭窄(きょうさく)に陥った人たちがどんどんことを決めていくから、強者はいよいよ強くなり弱者はひたすら惨めになる。

強者は必ず弱者を生む。いや、ことは相対的であって、**弱者がいなければ強者は存在し得ない**。水俣ではチッソと国家が強すぎた分だけ漁民は弱すぎた。ぼくも含めて国民はたぶん無自覚なままにチッソの側にいたのだろう。

今上と皇后は、**自分たちは日本国憲法が決める範囲内で、徹底して弱者の傍らに身を置く、と行動を通じて表明**しておられる。お二人に実権はない。いかなる行政的な指示も出されない。もちろん病気が治るわけでもない。

しかし**これほど自覚的で明快な思想の表現者である天皇をこの国の民が戴いたことはなかった。**

～この文書は、

<天皇・皇后ご夫妻の「生命・環境・人権よりも経済・軍事・統制を優先する」動きとの闘い> (下記URLをクリックしてください)

に掲載されているものです。～

<http://fileshelf.cocolog-nifty.com/blog/2013/05/post-f31f.html>